

# 中国社会の行動原理:「関係」(guanxi)と「想い」(想法 xiangfa) —日中比較文化論の視点から—

## Guanxi & Xiangfa as Analytical Perspective for Chinese Culture

岩田奇志

### I 序

筆者は、先に日中両社会の行動原理を比較する分析枠組として、日本の社会における基本的な行動原理としての「場における自己の(位置)の認知と認知した自己の位置に期待されているであろうと自らが考える主体的行動」(客観的でもなく主観的でもない行動:これを筆者は「客視的」と読んでいる)を、また中国社会における基本的な行動原理としての「自己の想いへの執着とその重要な帰結としての二者間の深い情いに基づく関係」という二つの行動原理を提示した<sup>1)</sup>。

これらの命題は、日・中文化の比較分析における分析枠組として提示したものであって、日・中の社会に見られる多様な諸行動を、どのような角度からみるとよりよく理解し説明できるかという視点で提示されたものである。

ここで筆者のいう「文化」とは、ある範囲の人々の多くに現れる行動様式とその背後にある行動原理及び価値観を指している。

そこで本稿では、中国人の行動原理を更に深く理解するために、従来、中国社会ないし中国人の行動原理を分析するためのキーコンセプトとしてしばしば取り上げられてきた「関係」(guanxi)と筆者が提唱する「自己の想いへの執着とその重要な帰結としての二者間の情い(qing)に基づく関係」との関わり、および分析概念としてのそれぞれの有効性について検討する。本稿では、以後特に断らない限り、括弧付きでの「関係」を中国的な guanxi の意味で使用し、「情」を中国的な qing の意味で使用する。

ここで筆者の言う「自己の想い(想法)への執着」について、簡単に説明しておく。この概念は、日中文化の比較を踏まえると、より鮮明に説明できると思う。すなわち、中国人の場合、日本人に顕著に見られるような、「世間」とか「場」の意識が弱く、漠然とした外部の期待を感じて行動することが少なく、いわば、目に浮かぶ具体的な二者間の期待を意識して行動することから、「自分のなかに内在する自分の想い」すなわち自己の判断・あるべしとする考え・ありたいとする考えにしたがって、外部の制約を意識すること少なく行動しようとする傾向を指している。そして、この傾向が、二者間の深い「情い」につながってゆく。

ここでさらにもうひとつ、中国人の「自己の想いへの執着」と「人間としてのあるべき姿=良心」との関わりについて触れておく必要がある。中国人の「自己の想いへの執着」を強調すると、中国人が外部の制約なしに「勝手に行動する」という誤った印象を与えかねないからである。つまり、中国人の場合、他の社会と同様、ある種の価値観が内在化されているのは当然として、その価値観が中国的特徴をもっていること、それが人によって大きな幅をもっていること(中国人の行動の多様性はそこから生まれる)、外部制約に対する自己の想いへの執着が強いことにその特徴が認められることにある。日本の場合は、「世間」や「場」などの「外部視点を重視すべし」という行動原理が内在化されており、「内在化された価値」と「状況の要求」とが統合されたところに行動が現れるという特徴がある。

中国人の内在化された価値ないし制約についてもう少し述べると、次のようになる。中国社会にも、相手に大きな損害を与える場合、例えば、偽物の食品や薬品など、意

図的に他者に害を与える行為に対して、「人間としての良心」や「人間としての道徳」を問われ、非難を買うことになる。つまり中国社会では人間でいたいならその良心をもたなければならないし、人徳を身につけなければならない。自己の想いに基づく行動は自己に利益をもたらすかどうかに関係なく、他者に不便や損害をもたらす場合、「良心給狗吃掉了（良心が犬に食われてしまった）」「没良心（良心がない）」、「不道德」または「缺徳（人徳にもとる）」と非難される。自分の考えや欲求に基づいて人道にもとるような行為を行うことは、「不是人（にんげんではない）」と非難されることを避けられない。つまり、人間から動物に格下げられることになる。例えば、中国社会では、弱者をいじめる行為は、「欺軟怕硬（弱い者をいじめ、強い者を恐れる）」とあって、人間として最も軽蔑される行為の一つである。「狗仗人勢（犬が主人の力を笠に着るように、他人の勢力をかさに着て人をいじめること）」などをあげられる。また残忍非道な仕打ちは、「傷天害理（天に背き道理にもとる行為）」とあって、天罰が下るということになると思っている。例えば「断子絶孫（血統を絶つ）」「不得好死（ろくな死に方をしないぞ）」などをあげられ、「善有善報，悪有悪報。不是不報，時間未到（善には善の報いがあり、悪には悪の報いがある。報われないのではなく、まだその時が来ていないこと）」という考えはある。他者に害を与えるような行為は他者からの非難を受けることになるだけではなく、親や親戚に非難されることも十分あり得るし、関係が悪化し、断ち切る「絶交」ということもあり得る。未成年者が他者に不利益をもたらすことなどを起す場合、以上のような非難の言葉を使われなく、「没家教（躰が悪い）」と非難し、親に責任を求めることになる。この場合、子供は「給父母的臉上摸黑（親の顔に泥を塗る）」ということである。

中国社会でこのような個人の想いや行動を制御する道徳をどの程度身につけるかは人それぞれである。つまり、性格や人柄は、親や家庭を初め育った環境の影響を認めたくてもその人自身の責任にあると考えられている。そして、自制力が強く、度量が大きく包容力がある人を、「有修養的人（「修養」を積んだ人）」と評価する。中国では読書することが道理を知り、人格の修養を積むという考えが強くみられる。中国社会では言行に「通情達理（言行が道理をわきまえ情理にかなっている）」が求められる。

以上、中国人は、一般に「自己の想い」に強くこだわる傾向が見られるが、彼らも以上のような内在化された制約のもとで行動しているとみることができよう。

## II 「関係 (guanxi) 社会」という捉え方

### 1 中国社会における「関係」の役割と重要性

これまで、中国の社会関係や中国人の行動の特徴をとらえるうえで、中国社会特有の「関係」が重視されてきた。このような意見は識者の間でも一般大衆の間でも広く同意されている<sup>2)</sup>。「中国では『関係』を頼りにしなければ生きていけない」という異口同音の発言には、たびたび接する。

ここで中国社会で重要な意味をもつ「関係」を、「個人が社会的資源や便宜を獲得するために動員できる人的つながり」と定義しておく。中国人の世渡りのコツをあらわす諺「一個朋友一条路」に示されているように、「一人の朋友は世を渡る一つの道」であり、「関係」は個人の何らかの目的を達成するために動員できる人的資源であると考えられている。人間はその生存を維持するために、社会的資源の獲得競争に巻き込まれざるをえない。「関係」を重視する中国社会では、人的なつながりはこのような競争を勝ち抜くための重要な要素である。つまり、中国の社会において、人々の日常生活の営みが、「関係」があるかないかによって大きく異なってくるという現象は

随所に見られる。中国では、教育、就職、治療、住宅の購入、昇進をはじめ、手に入りにくい商品・娯楽サービスなどを獲得するために「関係」が使われてきている。

「関係」は中国人の生活の隅々にまで入り込み、中国人は自分でつくりあげた「関係」の網のなかで生きており、また彼ら自身、このことを鮮明に意識している。こうした「関係」の如何は、時に裁判の結果さえも左右することがある。

現実にこのような生き方をしている中国人は、常に「関係」の網を広げたり強めたりすることに細心の注意を払っている。筆者がインタビュー調査を行った、ある中国人経営者、事業に大きく成功し企業を急速に発展させつつあった経営者たちは、彼らの経営努力の半分以上が「関係」づくりに費やされていると述懐している。

このように、中国社会では、「関係」が社会的資源の配分に大きく影響するのは否めない事実である。中国語の「関係」にかかわる次のような表現は、「関係」についての中国人の考えをよく表している。すなわち、中国人が人の力を借りて問題を解決しようと思う場合、「找関係（コネを探す）」、「拉関係（コネをつける）」といった表現や、これと同じ意味で「找人」・「托人」・「找門路」（つてを探す）といった表現をよく使用する。また中国人同士が強い「関係」でつながれていることを、「鉄兄弟」（鉄ほど強い絆で結ばれる兄弟）、「関係很硬」（絆は堅い）などと表現する。つまり、これらは頼んだら、必ず協力してくれる関係である。

それでも、経済改革開放前の時代には、人々は「単位制」のもとでの厳しい制約を受けていたし、互いに交換できるような資源は少なかったので、この時期「関係」の活用は制約されており、今日ほど現実に「関係」が横行することは少なかった。しかし、こうした観念そのものは、中国の文化に深く浸透していて、経済改革開放以後、私有制と市場経済の導入にともない、中国人は「単位制」の束縛から大きく解放され、個人の利益を獲得するために、「関係」は、かつてないほどに活用されるようになって<sup>3)</sup>いる。

## 2 中国社会における「関係」への意識

中国では、動員可能な人的つながりをもっていることを「有関係（コネをもっている）」と言い、その逆を「没関係（コネをもっていない）」という。「関係」をもっている人は、「関係」を持たない人より万事優先的に考慮され、社会的資源の獲得の可能性は高い。中国社会では、こうした「関係」を構築する能力を「交際能力」と名付け、友達や結婚相手の選択の時にはこれを大いに重視する。

それでも多くの中国人は、「社会的資源の獲得競争は、理念的には、個人の實力による平等な競争であるべきだ」と考えている。したがって、彼らの多くは、「関係」を利用することを「走后門（裏口）」などといって一応批判的な態度を示してはいる。しかし、現実には、限られた社会的資源の下で生活を営む他人同士は、同じ立場にある他人にかまってはられないし、「関係」を用いて他人を出し抜くといった行為に対して、心に痛みを感じることも少ない。むしろ逆に、中国人は「関係」の構築に長けていない人、或いは敢えて「関係」を利用しないで實力で生きていこうとする人のことを「傻瓜（馬鹿）」と蔑む傾向さえある。「関係」をぬきに實力で生きていこうとする人間は、いずれどこかで行き詰まるに違いないと信じてもいる。

以上中国社会における「関係」の重要性については、大方の中国人大衆が異口同音にこれを唱えており、この概念を中心に中国人の行動を分析し、その学術的な所論を展開してきた日本人研究者園田茂人は、自身、次のように述べている。

筆者は以前、中国社会の構成原理を「関係主義」と名づけ、日本社会の構成原理とは性格を異にする点に日本人研究者の注意を喚起したことがある。

「没関係」など日常用語でも頻繁に用いられる「関係(guanxi)」という言葉に注目すれば、中国の社会関係がもつ基本的な属性が理解できるのではないかという着想は実は筆者の中国留学中に得られたものである<sup>4)</sup>。

### 3 園田茂人の「関係主義」論

園田茂人は日本人の「集団主義」と対比して、中国人の行動原理を「関係主義」と名付けて分析を行ってきた。「関係主義」は「面子、関係、人情」の三つの要素で構成され、相互に絡み合うことによって中国人の行動文法を形成しているとするが、「関係主義のエッセンスは、親疎の度合いによって関係の性格が異なり、それによって享受できる資源の量が違ってくるという点にある」と指摘する<sup>5)</sup>。

更に、親疎に応じた人間関係を、園田は、中国でしばしば使われる次の三つの言葉、すなわち「自己人」、「外人」、「熟人」の三つの言葉によって整理し、以下のように中国人の人間関係を三つに分類している<sup>6)</sup>。

- 1 「自己人」:「親」の感情を共有する人々」、つまり「私とあなたとの間には分け隔てるものがないぐらい親しい」、という意味をもつ<sup>7)</sup>。
- 2 「外人・陌生人」:「公平原則が支配する世界」であり、「外人の間では『不講人情(人情を語らない)』のが一般的である」<sup>8)</sup>。
- 3 「熟人」:「最も日常生活には、自己人ほどに親しくはないが、外人ほどに無関係ではない、「知り合い」とか、「知人」と呼ばれる人たちがいる。そこに様々な人間関係の力学が生じる原因がある」と園田茂人は述べている<sup>9)</sup>。

園田茂人が整理したように、中国人は、自分とのかかわりの程度によって、人を「自己人(身内)」「外人(赤の他人・外部の人)」「熟人(顔なじみ・知り合い)」と区別している。血縁関係で結ばれた親類のことを「自家人」と呼ぶこともあるが、これに次いで最も親しい人である「自己人」とは家族のように付き合って互いの助け合いを頼りにできるという関係である。「外人」とは気をつけるべき見知らぬ他人あるいは関係を持たない外部の者である。「熟人」とは日常挨拶程度のコミュニケーションを行っている知り合いである。困った時、こちらの働きかけと相手の気持ち、利害の一致などによって、協力関係が成立する可能性がある。このように人と人の関わり方を三つに大きく分類することによって、日常の関わり方をかなりの程度説明することができる<sup>10)</sup>。

## III 「関係」についての中国人研究者の分析

### 1 費孝通の「差序格局」論

1930年代初期に中国では、すでに欧米発の社会学の概念や理論が中国社会への分析に適切ではないことに気づき、「社会学中国化」という学界の共通認識と要求が現れた<sup>11)</sup>。そこで英国で学位を修得した社会学者、人類学者費孝通は、文化人類学の研究手法、実地調査を通して中国社会を研究することにたどり着いた。彼は欧米社会の社会構造を「団体格局(団体構造)」、中国社会を「差序格局(「格差と序列による構造)）」と名づけ、欧米社会と比較して中国の社会構造の特徴を説明している。

欧米社会では、個人主義の下で、個人は資格に基づき、様々な「団体」に参加し、「団体」のなかで同等なメンバーシップを獲得し、個人の権利を侵されないことになっている。これに対して、血縁と地縁を最も重視する中国の伝統社会では、「団体」というものが見られず、人々が自己を中心に同心円状に広がっていく人間関係のネットワークでつながっていく。波紋が及ぶところには関係が発生する。親族関係がもつ

とも「差序格局」の特徴を示している。「自家人（身内）」は自分の人間関係のネットワークに入れ、親しくしようとするいかなる者も含めることができ、またその範囲が時と場合によって伸縮でき、時には数え切れないほどまで広がり、天下を一家になすこともできる。自己を中心に広がった各自の人間関係の輪は、無数の私人関係でできたネットワークで、私人を結びつける道徳は「私徳」である。「孝」、「悌」、「忠」、「信」は皆私的關係における道徳要素である。孔子の言った「仁」という観念は論理的総合で、すべての私人関係の道徳要素の共通点である。政治的責任を負う君主でさえも、まず彼の私人間の道徳を完成しなければならない。中国の社会と法律は、施行対象と「自己」の関係によってある程度伸縮できる。西洋の団体では、個人は地位が平等で一人が他の構成員の権利を犯すことができない。ただし、憲法上では、団体は個人を否定することができないが、個人は認められた一部の権利を通して団体をコントロールすることができる。これに対して、中国の伸縮に富んだ社会関係ネットワークは、「己」を中心とするものであるため、個人が団体に相対する西洋社会の「個人主義」とは異なり、「自我主義」と呼ぶことができる。中国で最も重要なのは「己を克して礼に復える」、「壺是に皆修身を以て本と為す」ことであり、これは「差序格局」のなかの道徳体系の出発点である<sup>12)</sup>。

費による「差序格局」というモデルは、中国の伝統社会の人間関係の範囲を明らかにし、人間関係のネットワークの特徴を大きく解明した。それは親戚と近所隣の知り合いで構成されている農村という中国の伝統社会にみられる人間関係の特徴として抽出された。「差序格局」というモデルは、20世紀40年代に提出され、西洋の社会学の理論・概念や二項対立のモデルで中国社会をとらえていた方法から脱出し、社会学における中国社会の研究に画期的な貢献をなし、今日も「差序格局」に比肩するほどの分析概念はないと翟偉学は指摘している<sup>13)</sup>。

しかし、「差序格局」という概念は問題点も残している。「差序格局」という概念は比喩を用いて説明され、明確な定義が行われていないことである<sup>14)</sup>。

## 2 黄国光の「人情と面子のモデル」

1980年代以後、台湾や中国の学界では「差序格局」という理論に基づいて、更に西洋の理論を導入して、主に稀少資源の交換における人間関係の特徴を検討する研究が現れている。その代表的な研究としては、台湾の社会心理学者黄光国が1988年に提示した「人情と面子のモデル」をあげることができる。

台湾の学者黄光国は、社会希少資源配分の分析において、社会資源理論や社会交換理論を導入し、人間関係の親疎の度合いによる「情感型人間関係」、「混合型人間関係」と「道具型関係」という三つの分類に基づき、「人情と面子のモデル」を提示し、中国人の行動原理と行動様式の特徴を検討した。

「情感型人間関係」において家族、親友、いわゆる「自家人」、「自己人」はこの関係に該当し、「需求法則（需要原則）」に基づき、個人の欲求を満たすことになっている。しかし、家族のなかでも人間関係のトラブルが発生することもあり、これを「親情困境（親情ジレンマ）」と呼ぶ。「混合型人間関係」において、親戚、学友、師弟、同僚、同郷など、いわゆる「熟人（知り合い）」が該当し、「人情法則（人情原則）」に基づいて互いの欲求を満たし合う。この場合も、相手に支払ったコストに対して将来に得られる報いのことを考えていると、「人情困境（人情ジレンマ）」に陥ることがある。「道具型人間関係」において、店員と顧客、バスの運転手と乗客、病院の看護師と病人などがあげられ、彼らの間では基本的に公平の原則に基づいて資源を交換する<sup>15)</sup>。

「差序格局」という理論と欧米の社会交換理論や社会資本理論とをあわせて構築した理論は「差序格局」に含まれる深い考えを大いに単純化したのが、ただ血縁・地

縁・知り合い、他人、家族、友達などの関係の記述に止まることになる<sup>16)</sup>。

筆者は、「人情と面子のモデル」には次のような問題があると考えている。①中国社会の行動様式において血縁・地縁関係による親疎の程度が重要な要素の一つであるといえるが、これらは必要十分な条件ではない。これ以外の、行動者自身のその者・事に対する個人の判断も大きく影響を及ぼす。従って「親情ジレンマ」と「人情ジレンマ」に陥る。②法律やルールを重視しない中国社会では他人同士の間には「公平原則」が機能するかどうかは疑問である。

### 3 翟偉学の分析：「個人地位」

翟偉学は、「関係」は中国人が日常口にしている人情、面子、感情と報であり、人情と関係は面子から派生した二つの概念であるという<sup>17)</sup>。彼は人情、面子と関係に含まれる意味を「個人地位」という概念に統合する。人間関係は役割に関する交際方式で、役割の類型を概念的に示し、例えば儒家の五倫道徳は五つの役割の関係を表わしている。多くの学者は五倫の関係が中国人の人間関係であると信じ、こうした役割についての理論が中国人の人間関係を説明できると考えている。これには価値の次元と現実の次元のギャップが生じている。これに対して「個人地位」という概念は個人関係(personal relationship)を指向し、双方の仲と個人の付き合いの状況を指す。翟偉学は中国社会の家庭の財産分割の特徴から中国人の社会行為に「個人地位」の獲得は①権威(身分、年齢、地位、等級及び世代)、倫理(権威の特質を基礎にし、「忠孝」と「重義軽利」)。利益(経済、社会と心理上の平均性と均衡性の計算)、血縁(本当の血縁関係、拡大的血縁関係あるいは心理的に認めた血縁関係)を含める。中国伝統社会の家庭財産分割の特徴から抽出した四つの要素は組み合わせによって様々な変数が現れ、中国人の心理と行為には柔軟に変化する傾向がある<sup>18)</sup>。

中国人の社会心理と行動の分析モデルの構築は非常に困難である。たとえ種々の理論モデルを動員して説明力のあるモデルを構築しても、問題を統合的に理解するのは容易なことではない。多くの学者に認められるようなオリジナルな理論モデルの構築は極めて困難であると翟偉学は指摘している<sup>19)</sup>。

## IV 見知らぬ他人同士の関わり：「自己の思い」による判断

農業を中心とする中国の伝統社会では、血縁による家族・親戚と地縁による隣近所の知り合いのなかで生きる中国人は、この地に生まれ育ち、幼い頃から多様にかかわりあうことで親密さを覚える顔見知りの関係で信用を得ることができる。しかし、この郷土社会での人間関係の関わり方は、見知らぬ他人の集まる都市では有効性を失った<sup>20)</sup>。このため、都市では人間同士が強い不信感を抱く。実際、具体的な事例で見知らぬ人同士の関わり方を見てみよう。

<事例1>ある大学図書館を利用するには、学外利用者は規則上身分証明書を提示し、登録すれば入館できることになっていた。しかし、ある門衛は自己の判断(恣意的判断)に基づいて入館を断り、入館には図書館長の許可が必要だと言い張った。そこで他の図書館員に話したところ、「本を読むことはいいことだから、図書館長の許可は必要ないと言い、その職員が門衛に話してくれた結果、身分証明書の提示も登録もなく図書館を利用できた。その後、図書館を利用した時、身分証明書の提示と登録は一切求められることはなかった。

<事例2>ある大学で複写機を利用した時、小銭がなかったので、もっと大きい札を渡そうとしたら、もう端数の金額は要らないと言われた。すべて担当者の個人的「思い」と判断にもとづいている。

見知らぬ他人同士の間は親疎の度合いという要素が妥当しない。しかし、この場合の中国人の行動は必ずしも「公平原則」に基づいて行われるわけでもない。これまで

「関係のない」他人に対してはむしろ不公平に扱うという指摘が多くなされている。どんな要素を重視して行動を決定するかは個人個人の考え（想い）によって異なる。

#### V 「関係」では説明しきれない中国人の行動様式

このように「関係」という概念には、中国人の行動様式を説明するうえで一定の有効性が認められる。しかし、スタティックな性格をもつ「関係」という概念では、変化の激しい中国人の人間関係のごく一部しか説明できない。そこには説明できない様々な問題が残ると筆者は考えている。以下こうした問題のうちの重要なものについて検討する。

中国人の人間関係は、以下のような事情から、うちに不安定な要素をはらんで、その変化は激しい。

- ①中国人は、意気があえば急速に距離を縮め、親密な「関係」を形成することが珍しくない。
- ②その結果、中国人は、親族にも比すべき親密な関係を形成し、相互に強い期待をもつようになる。
- ③しかし、こうした相互の期待が十分に満たされないと、両者の「関係」は急速に傷つき消滅する。時にはそれは、疎遠な関係よりもなお悪い、一種の恨みを含んだ憎悪にさえも転化する。

##### 1 急速な「関係」の形成

中国人の人間関係は、血縁関係で結ばれる親族関係を除けば、相互の関わり方が激しく変わるという重要な特徴をもっている。すなわち、中国人の場合、ごく短時間に人間関係の距離を縮めたり、急速に離反したりするという傾向が見られる。日本人がよくなじんだ「なじみの関係」を築くには、多くの場合かなりの期間を必要とする。またひとたび信頼に裏打ちされた「なじみの関係」が形成されると、双方が融和的關係の維持に気を遣う結果、その関係は、比較的安定している。

これに対して、中国人の場合、相手が気に入ればごく短い期間の接触（たとえば一週間程度の接触）で、兄弟姉妹になぞらえられるほどの親しい関係が形成されることが珍しくない。時には一度の接触でも互いに親友として付き合い合おうと決意するケースもある。

中国人 A さんは、大学で中国人 B さんと出会った。ある日、二人が初めて挨拶を交わして簡単におしゃべりをした時、大いに話が盛り上がった。その時 B さんはAさんに伝えた。「私はあなたの弟、あなたは私の兄よ。今後私たちは身内のようなもの。近いうちに一緒に食事しましょう」と。Aさんは、とても嬉しくこれに同意した。

中国人の間ではこのようなケースが多く見られる。日本人も、相手が気に入って「今度一杯やりましょう」などと飲食の約束をすることがある。しかし、こうした場合の親近感、もちろん中国人の場合と大きな隔りがある。日本のそれは、兄弟姉妹（しかも中国的に親密な兄弟姉妹関係）になぞらえるような関係とは、意識の内容が大きく隔たっているからである。これに対して、中国人の場合には、見知らぬ他人同士の間で唯一度の接触でも、内心相手を友人として選ぶかどうかを決めるケースが少なくない。

長年日本で仕事をしている中国人の女性弁護士馬英華氏もこうした中国人の傾向について、次のように述懐している。

中国人は、気が合えば、すぐに親友になれる。逆に、あまり深くコミュニケーションがとれそうにない、懐に飛び込めない人かどうか、すぐにわかります。中国人は、本当に好き嫌いがはっきりしていて、それを隠すことができません。隠したいとも思っていないので、うわべで付き合い合うことはしません。いずれはバレてしまうからです。

私は、中国に帰って家族や友人と話をすると、本当に中国人はストレートだなと感じます。自分の本音をストレ

ートにぶつけることで、相手を傷つけてしまうことも多いでしょう。<sup>21)</sup>

仕事相手であっても、気に入ったらとことん好きになるし、そういうコミュニケーションをとります。衝突した時の激しさも半端ではありませんが、気が合えば親友になってしまうのが普通です。<sup>22)</sup>

広場で行われる社交ダンスでは、当然、知らない者同士で踊ることもあります。何曲も踊っているうちに、自然と「仕事は何をしているのですか？」という話になるし、意気投合すれば、一緒に食事に行きましょうということになる。

中国人は一回会って、五分か十分のあいだで、その相手と付き合っていけるかどうかを判断します。そして、相手を気に入れば、親密になるまでにそう時間はかからないのです。<sup>23)</sup>

## 2 亀裂の発生

また、親しい人間関係のなかで生きている中国人は、相手の面子に配慮しつつも、本音でぶつかり合うので、親友のあいだで考え方の違いがよく現れてくる。個々人の考え方は当然異なると考えている中国人は、こうした意見の違いを、普通、互いの考え方を理解する好機と考え、熱意を込めて語り合う。結果として、同一の認識には辿り着かないことが多いが、互いに相手の考え方を把握することができる。それによって、こうした理解が、それ以後付き合いを維持したり、関係を深めたりするのに役立つ。

しかし、こうしたやりとりでは、互いに譲れない大事な考え方について意見が大きく別れたり、また場合によっては、意見の違いが納得できないまま、それが相手の人格評価に繋がったり、こうしたやりとりで、たとえ些細なことであっても、どちらか一方、あるいは双方が「面子」を傷つけられたと感じたりすると、親しい関係にはたちまち亀裂が入り、両者の関係は一気に遠のき、対立関係が発生し、修復は困難になる。

このように、日本人の人間関係に比べると、中国人の人間関係は、非常に不安定であることにその特徴が認められる。吉村章も次のように指摘している。

日本人と中国人とでは決定的に違うことがあります。それは面子を潰された時の「深刻さ」です。中国人が「面子を潰された」と感じる時の「深刻さ」は、日本人の想像をはるかに超えていると言っていいでしょう。

人や物事の程度差によっても違いがありますが、不用意に面子を潰すような言い方をしてしまうと、後で取り返しのつかない事態になってしまいます。「そんなに深刻に受け止めるなよ」とか、「軽い冗談のつもりで言っただけだよ」という言葉は絶対に通用しないのです。

そして、一度潰してしまった「面子」を回復するには相当な時間を要します。これまで長い時間をかけて築いてきた信頼関係が一気に壊れてしまいます。もしかしたら、修復不可能な事態に陥ってしまうかもしれない<sup>24)</sup>。

「関係」を重視する園田茂人も、関係の不安定性を次のように認識している。

個人レベルで見た場合、中国人は日本人に比べても自尊心が強く、みずからの能力を高く評価しがちである。知り合いの間柄では、互いに相手の顔を立てあおうとし、そのバランスが崩れた時に怒りを爆発させる<sup>25)</sup>。

また江河海も、次のような興味深い指摘を行っている。

上は政府高官から下は一般庶民まで、中国人は誰でも自分のメンツをもっている。だが、メンツのどの部分に重きを置くかは、性別、年齢、立場、地位、学歴、職業、性格、思想、生活地域などによって違い、時間、場所、相手、状況によっても、微妙に差が出てくる。だからこそ、ある特定の人間、特定の事

件によって具体的に考えていくことが重要で、一つの物差しですべての人のメンツ、すべての場合のメンツを考慮することができないのだ。

たとえば、甲は乙の前ではメンツがあるが、丙の前ではメンツがない。ある状況下ではメンツにこだわるが、別の状況のもとではこだわらない。ある一時期はメンツを飾っていたが、別の一時期は気にしない。あることに関してはメンツを争うが、別のことに関しては争わない等々、それぞれ個別に考えていかなければならない<sup>26)</sup>。

## VI 「関係」概念の不十分さ

以上分析してきたような、中国人の人間関係に現れているこうした不安定な側面を説明するうえで、スタティックな性格をもつ「関係」というキーワードは必ずしも十分であるとは思われない。「関係」というキーワードは、ある時点での「助力を惜しまない関わり」の如何に着目して、中国社会の構造や中国人の行動原理の特徴を説明しようとしている。しかし、現実にはダイナミックに動いている。現実の中国人の間で激しく揺れ動く人間関係、あるいは行動様式の特徴を説明するためには、こうした関係性の不安定さを生み出す概念、すなわち「想い」(想法 xiangfa)の概念を導入する必要があると、筆者は考えている。

### 1 中国人同士の間での行動の多様性と流動性(不安定性)

日本人同士の間での行動様式も、当然一人一人異なるが、その多様性の範囲は比較的限られていて、全体的にみるとある一定の範囲のなかに収まるように思われる。しかも、この一定の範囲はそれほど広くないので、集団のなかで生きる日本人の行動にはある共通性が強く表れる。その背景としては、拙稿「日中社会の行動原理と行動様式:比較分析(1)―『場における自己の認知』と『二者間における情への執着』―」ですでに指摘したように、日本人の場合、「場」における自己の位置の認知が濱口恵俊のいうアウトサイド・イン型の認知態様をとる(すなわち、場の状況をふまえて、その中における自己を認知すること、日本人の行動は、こうして認知された自己の立場をふまえて主体的に行われること、その際行動の基準として「場の融和」が重視されること、ことに組織にあつては「公的期待」が強く作用することなど、「場による規制」が働くため、勢いその幅が狭くなる(すなわち逸脱が抑えられる)こととならざるを得ない。そしてこの場合、日本人の「ホンネとタテマエの分離」がこの傾向を支えていると考えられる<sup>27)</sup>。

これに対して、中国人の場合、「場」の意識が弱く、中国人の行動にはこうした「場」による抑制が働きにくいために、それはより率直ないし奔放なものとなる。その結果、人々の行動の間に見られる共通性は少なく、個々人の「想い」が強く現れてくる。

こうした中国人の行動の多様性は、そのある部分は土地の広さや風土・方言・習慣の違いによるところもあるが、その本質的な部分は、行動に対する文化的な制約の弱さに基づくものとするのが妥当であろう。

日本人のように「信頼して相手に任せ」たり「落としどころを探る」という考え方をもちない中国人の場合には、互いに遠慮なく本音で話し合おうとするので、親友が集まって相談する場合にも話がまとまらないケースが多い。

一例を挙げると、日本人が会費制(割り勘)で食事会をする時、誰かを幹事として選び、進行を彼に一任することが多い。そして幹事の決定に対しては、皆よほどのことがない限り文句を言うことなく、また「ご苦労さん」と感謝の気持ちで幹事に従うのが普通である。

しかし、中国人の場合、食事会を行う時、会費制(割り勘)にすることは考えにくく、誰か一人が全員の食事代を支払うのが根強い伝統である。仮に(仮の想定として)中国人たちが会費制で食事会をしたと仮定すると、彼らは、お金を出す以上、幹事の一言で決めることには納得がいかず、また決められたことについてはさまざまな文句が続出するであろうことが想像できる。

中国人の場合、親友同士の食事会の場合は、最初から誘う人が支払うケースが殆どで、彼が店やメイン料理を決めることになる。ただし招待された人は、食事への軽い希望を遠慮がちに述べることはある。

中国の組織のなかには、当然様々な性格の人々がいる。与えられた範囲の明確な仕事は真面目に取り組むが、自己主張・競争意識が強い人、与えられた仕事をほどほどに、自らの利益を固く守ろうとする人、他方少数ではあるが、人がやりたがらない仕事を黙々と真面目にこなし、競争や自己主張が苦手な反省する意識の強い人などさまざまである。

## 2 他人同士の間「関係」の構築と関わり方

### 1) 親密な「関係」の形成と「情」の重視

すでにみたように、中国人が出会って話しているうちに気が合うと、一方がもう一方に対して「これから我々は兄弟(姉妹)です」、あるいは「これから我々は友人(親友)ですから、互いに何でも遠慮しません」、「これから我々は「自家人」(身内)ですから、あなたの事は私のことですよ」と言い出すことがよくある。このように相手を「身内」として扱うことは、相手を信頼して大切にすることを意思表示であるから、言われた側はこれを嬉しく感じるのが普通である。またもしこれをはっきり断ると、ふつう相手は「面子」をつぶされたと感じるから、「身内」と言われた側は、まだ相手を「身内」として受け入れる気持ちが育ってなくても、この関係を明確に断わることはまれである。このようなケースは、その後、接触を重ねるなかで親友となってゆくこともあるし、気持ちが離れて別れることも当然ある。

互いに親友として付き合うと決めた中国人同士は、一気に家族のように親しく暖かく付き合う関係に入る傾向がある。馬英華は、日本人の人間関係を「間を取る」と表現する一方、中国人の人間関係を、「ゼロ距離」と表現している<sup>28)</sup>。

このように、中国人は、日常生活のなかで、主に「情」(その根底にある思い)で深く結ばれた家族や家族なみの親友との関係(「自家人」)でできた緊密なネットワーク(「関係網」)のなかで生きているので、こうした人々の「面子」に対しては大いに配慮するが、こうした「関係網」の外にいる人々に対しては、基本的に本音でストレートに付き合う。つまり、日本人に比べると、中国人は日常生活でそれほど神経を使う必要はないということである。親友関係以外の顔見知りの関係はそれほど神経を使う必要もないし、また赤の他人に対しても勿論気を使う必要はないからである。

また、中国人はこうした親密な「関係網」の内にいる人々に対しては、状況にかかわらず、互いに情熱を込めた熱烈な言動を求めている。彼らは、人前であろうと、会議場であろうと、熱烈に親情を表明する。「場所柄をわきまえて控えめな表現をする」日本的な態度とは異なる。

### 2) 「情」の本質性と手段性

困難に遭遇した中国人は、家族はもちろんのこと、親友にも強く援助を求める。このことは、中国人の間では当然のことと考えられている。また、援助を訴えられた中国人は、家族や親友のことを自分のことのように思い、相手に対して献身的に尽くすことが求められている。その結果、是非善悪に関わらず「友の友は友」である。中国の諺「人敬我一尺、我敬人一丈(相手が私を尊重してくれれば、私はそれ以上相手を尊重すること)」、「滴水之恩当湧泉相報(一滴の水の恩を受けたら、泉一杯の水で返すこと)」といった表現は、中国式誇張を含んではいるが、中国人の考え方を鮮明に示している。そして、こうした道義観が、中国社会の親密な関係を裏打ちしている。

このような行動原理のもとでは、相手がしてくれることを断ることもできないし、また相手がしてくれたことには、それ以上にお返ししなければならぬ。また、相手に頼まれたことには全力を尽くして取り組まなければならない。たとえ本人にとって無理なことであっても、場合によって、

公の利益や法律に違反する場合であっても、あるいは組織のルールを犯してでも、実行しなければならない。そうでないと、相手の面子をつぶしたことになる、感情を裏切ったと解釈されるからである。このように、中国人の「情」には、困窮時における相手からの「援助」を当然とする期待が含まれている。濱口恵俊は、欧米人の社会関係を「対人関係の手段視」、日本人の社会関係を「対人関係の本質視」と規定したが、中国人の親密な関係は、こうしたダイコトミーでは割り切れない<sup>29)</sup>。それは、対人関係を本質視するなかに、それ故にこそ手段性が入り込んでくると言うべきか、あるいは、手段視と見える関わりのなかに、「一滴の恩にも泉一杯のお返し」を意識するというような本質視がみられ、それは単純には割り切れない関わりとみる必要がある。

### 3) 「法」に対する「情」の優先

中国は「人治」の社会といわれるように、法は人によってつくられたものにすぎず、法の制定者や執行者自身が法を守らないことがよくあるし、法は人によって便宜に動かされるものと考えられる。このため中国では、家族・友人の違法行為に対しては、親族や友人たちが、罪を軽くするためにあの手この手を使って、必死に奔走する。司法検察官を接待したり、裁判関係者に金品を送ったりして、裁判に影響を及ぼそうとする行為は、さほど罪の意識もないままに行われている。これは日本と大きく異なっている。中国人も家族の犯罪行為の程度によって恥を感じる気持ちはあるが、それは日本人ほど強くはない。また犯罪者を助ける行為はよくないという認識もあるにはあるが、友人に頼まれれば、それが違法行為であるからといって、手助けを拒むことは難しい。

日本の社会では、犯罪者の家族は、世間の目を気にして、罪を犯した者を助けるどころか、「世間様に申し訳ない」と自ら咎める傾向が強く、犯罪者の家族は早く捕まって罪を償って欲しいという気持ちさえも持っていることが多い。日本では、殺人など悪質事件の犯罪者を出した家族は、世間様に顔向けができないと感じて、時には自ら職を辞し、ひっそりと人目につかないように暮らすことはしばしば耳にするところである。

### 3 期待が満たされない時:「関係の崩壊」

しかし、中国人の家族や友人の間では、是非を超えて強く助け合うことが期待されている。このため、家族、特に親友が自分の要求に対して十分に答えてくれないと感じ取る場合、以後の付き合いには大きなひびが入ることとなりかねない。要求を満たされない側は、相手がこれまで自分が注いだ感情を裏切ったと思われる場合、相手に不満を募らせる。頼まれたことが頼む本人にとって重要であればあるほど、期待が満たされなかった場合、トラブルが発生する可能性は高い。また頼まれた親友が全力を尽くしてくれなかったと思われる場合も、人によっては、頼む側はただ不満を感じるに止まらず、相手を恨む気持ちを抱くようになり、面と向かって相手を責めたり、相手の名誉、自尊心を傷つけるような悪い噂を流したりすることが起こりうる。

このように中国人の友人関係においては、この熱い関係を維持するには常に互いに相手の要求を満たしあうことを心がけている。このバランスが崩れると、熱い関係はたちまち冷たい関係になり、場合によっては、対立関係になることも少なくない。そしてこうした対立関係が発生すると、それは見知らぬ他人との関係よりもいっそう険悪な関係となり、関係の修復は非常に困難になる。

### 4 「関係」論の限界

中国人が血縁関係と親友関係を中心としてできたネットワークのなかに生きていることは先に指摘した。血縁関係は先天的なもので、意図的に構築する必要は勿論ない。しかし、これ以

外の「関係」の殆どは、個人の努力で獲得しなければならない。例えば、家族なみの付き合いをする親友は「自己人」と呼ばれるが、どうすれば他人から「自己人」の関係に飛躍できるかという問題は、スタティックな「関係」という概念では明らかにできない。親友は中国人にとって家族以外で最も親しい関係だと指摘されているが、しかし、どうすればこのような「関係」が構築できるのかという問題は、説明されないままである。同様に疎遠な関係の本質が何なのかも「関係」論においては分析されていない。

確かに中国の社会では、「関係」を最大限に活用して個人の生活を営む傾向がみられるが、「関係」のないところで、つまり見知らぬ他人同士の関わりが個人の生活に占める部分も無視できない。このような場合、見知らぬ中国人同士はどのように関わり合っているのかという部分は、「関係」というキーワードでの分析では、何もみえてこない。

現実には、中国人の社会にあつては、初対面であっても、場合によってはいい関係を構築でき、互いの目的を達成することができる場合も少なくない。「関係」という枠組に基づいて中国人の行動様式をみると、「自己人」の関係や「熟人」の関係と違って、「外人」の関係から短期間に良好な関係を構築できるのはなぜか、また、しばしば非協力的な態度で扱われるのはなぜかが、「関係」論によっては説明できない。先に分析した図書館やコピー機の利用の事例が示すように、中国人の場合、「関係」が形成されていない場面でも、「自己の思い」への執着は鮮明に見られるのであり、「関係」自体「自己の思い」への強い執着によって形成されるものと考えてのが妥当であろう。つまり、「自己の思い」が人間関係に投影された時、「情い」が発生し「関係」が形成される。急速な「関係の形成」なども、その一端を表すものと考えてべきであろう。

総じて「関係」という分析概念は、中国人の行動様式を解明するのに一定の有効性をもってはいるが、その一部のみと関わっており、中国人の行動原理の本質を解明するのに十分でない」と筆者は考えている。中国人の行動様式を「関係」というキーワードで捉えるのは、その行動様式の目に映りやすい表層の部分を描き出して、その深層の分析を十分掘り下げていないとすることができる。中国人は確かに日常生活のなかで頻繁に「関係」を活用している。しかし、「関係」の行き届かないところ、つまり、「関係」のないところでも中国人は互いの目的を達するために相互に接触しなければならない。そして、中国人の人間関係に現れてきた重要な特徴である変化の激しさは、「関係」というキーワードでは捉えきれない。これらの中国人の行動様式の本質を究明する鍵は、中国人に特徴的な「自己の思いへの執着とその帰結としての二者間の情い」であると筆者は考えている。このことは、日本人の多くが「職場」や「所属」の「仲間」の全体に対して「ある種」の情を感じているのに対して、中国人にとっては、「職場」や「同じ所属」に対しては、抽象的な関係として意識するのみで、その全体に対して漠然と「情」を感じることはまずないことと無関係ではない。中国人は、職場であろうとクラスであろうと、そのなかで、特に気のあった人物と遭遇すれば、その人との間に「深い情」で結ばれた「二者間の関係」を築きあげていくが、組織全体に対して「情」を感じることはまずない。

## VI 分析概念としての「思い」(想法)の有効性

### 1 欧米人・日本人の行動様式

欧米人の行動は、神の掟さらにその世俗化した法と契約を守るという枠内で、自由に自己の考えにしたがって行われるものとモデル化される。欧米人にとって法は恣意的に動かせるものではなく、厳格に適用すべきものである。よく引き合いに出される「135年の懲役」(それが現実にあったかどうか筆者は確認していないが)などの考え方は、欧米社会のこうした一面を示しているのかもしれない。また、同時に、すべての人は法の下で平等であるという「理念」が生きている。欧米の社会が「法治社会」であるといわれる所以である。さらに欧米社会の場合、一部下層の人びとを除き、こうした法だけでなく、社会全体で認められた道德規範が厳しい躰に

よって個人の価値観に内在化される。このように法と社会の道德規範を厳守した上で欧米人は個人の価値観・欲求にしたがって、自立的・かつ自律的に行動することになっている。少なくともこれは理念化された西欧社会および米国社会の姿であり、これこそが「個人主義」と訳される西欧 individualism の意味である。

一方、日本人の場合は、欧米人のような絶対的普遍的な法の意識と道德規範をもっているわけではない。「情状酌量」や「超法規的措置」など法解釈の柔軟性にみられるように、法の枠組自体が柔軟性をもっているうえに、日本人はその時その時におかれている状況のなかで、自分の行動が影響を及ぼす一定の範囲の人々の共通認識に強く影響を受けている。

例えば、長期的な関わりのもと「集団」のなかで生きる日本人は、組織の要求や仲間の期待の網を敏感に読み取ってそれに応えるように、「場」における自分の「位置」を認識し、それにしたがってみずからの振舞い方を決める。反省意識が強い日本人は、集団の要求や期待に添えない自分に「恥」を意識する傾向が強い。日常生活のなかで、日本人は周囲の人々のまなざしや行動を注意深く見つめながら自分の行動を調整する。つまり日本人は「世間」を意識している。周囲の人々に不愉快な思いをさせないように、自分の行動を律する。例えば、服装であつてもお化粧であつても、自分を誇示するというよりは周囲の人々に明るく楽しい雰囲気をもたらすように考える。周囲の人々を不都合にさせたり、暗くしたり、またいやな思いをさせるのは「恥」だと考える。日本人は周囲に対して非常に気を使い、自分の行動を抑制する傾向が強くみられる。逆に周囲を喜ばせることを喜ぶというのも日本人の行動の特徴である。日本人は自分の行動が影響を及ぼす範囲の人々の気持ち・納得を敏感に読み取り、人々の気持ちを損なわないように、また人々の納得を得るように自ら自分の行動を調整する。これはもちろん、日本の社会で多くの人々があるべき姿と感じているもの、いわば「理念」であり、すべての人々がこうした原理にしたがった行動しているなどということを示唆するものではない。しかし、こうした理念をもつ社会と持たない社会との差は大きい。

## 2 欧米とも日本とも異なる中国人の行動様式

これに対して、中国人の場合、「法」への認識は欧米人とは全く異なっている。法が整備されていない時代には、「法家」の思想に代表されるように、法とは「人民をコントロールするためのもの」であり、支配者のいうことが「法」であるとする考えが一般的であった。中国人の間では、このような意識が今日なお根強く残っており、「法」が制定されても、「法」は権力を握る者によって作られるものであり、制定者によって法は変えられるという法意識を受け継いでいる。古い時代には「法」はその制定者の一存で変えられた。新中国設立以後も、経済改革開放以後も、中国の基本政策が頻繁にかつ突如として変更されたことは記憶に新しい。そのうえ法の解釈も、法の執行者によって異なることがしばしばである。古い時代の支配者は庶民に法を知らせることさえしようとしなかったし、庶民は支配者に対して法について問い合わせたり、支配者の行為を正したりする権利も与えられてはいなかった。「法」は人々の権利を守るためのものと言うよりは、国民に課された義務を果たさない行為を取り締まるものとみなされる傾向が強い。こうした「法」の制定者や執行者は、みずから法の束縛を受けずに自分の想いで法を動かすことが少なくなかった。

中国の社会では、改革開放以後においても、担当者によって物事の取り扱い方が大きく異なるという現象がしばしば見られる。もし、このことについて担当者に「なぜ他の担当者はよいと言っているのに、あなたはだめなのか」と聞くと、「駄目なことは駄目だ。彼ができると言ったら、彼に頼んだら」といった返事が返ってくることは、筆者自身もしばしば経験している。公のルールよりも自分の想いが優先される結果である。

犯罪が発覚した場合、裁判関係者への接待工作がおこなわれ、量刑の軽減が行われるなど

というのは、日常茶飯事とされている。良識のある一般市民の間でさえも、こうした行為は当然のこととして受け止められている。罪の意識のないなかば公然たる汚職などもこうした意識をよく表している。「上有政策、下有対策(上に政策あれば下に対策あり)」という諺に表れているとおり、中国人庶民が、政府や役人によって作られた政策に対し対抗策を立てて自分の利益を守ろうとすることは、中国五千年の歴史のなかで培われてきた処世術となっている。したがって「法」への遵守意識はいきおい薄いものとならざるを得ない。今日、中央政府の汚職との戦いは、広く知られるところである。しかし、それさえも、権力闘争としての性格を強くもつものであり、自派への摘発は、権力基盤を大きく揺るがすものであると考えられている。

このような法への意識の特徴は、中国人の規範意識、ルール意識一般にも同様に現れている。公の場での割り込み、痰の吐きすて、ゴミの投げ捨て、交通ルール違反などの行為は、今日なお日常茶飯事である。改革開放以後、生活・教育水準の向上などによって中国人の規範意識にはかなりの改善が見られる。都市においては特にこうした傾向が見られる。都市では公の場で痰を吐くところを見つけられると、罰金を課されることもある。しかし、警察の取り締まりが厳しいところでは違法行為は少なくなるが、警察が見えないところでは、平気で違法行為を行うことも少なくない。このように中国では法は権威を持たない。人は「法」の上にあるので、「法」は人々を規制できないとみている。また、欧米人のように「契約」を厳格に守る意識も見られない。中国人は契約に書かれた個人の責務に対しても、相手に気づかないように手抜きをしたり、相手が弱いとみると相手を不利にしようとする傾向がある。中国では家政婦を雇う家庭が増えているが、当初契約した勤務時間より、口実を設けて 30 分遅れたり、はや引きしたりすることはよくある。

もう一つ欧米人の行動様式を特徴付けるものとして、「自分が社会の一員である」という意識をあげることができる。この意識の下で、欧米人は組織よりも社会に対する責任感を強く感じ取り、社会のなかでの役割を積極的に果たそうとし、また社会のなかでの成功をより重視する傾向が見られる。

欧米人のような「法」意識・「契約」意識を持たない中国人の行動様式はまた、日本人のそれとも大きく異なる。先に指摘したように、日本人は「場」における自己の位置を鋭く感じ取り、こうした自己として、「場」の「公的」ルールや期待を満たしつつ、「場」の融和を維持するような行動を取る。日本人は、中国人の多くがそうするように、自分の想いや欲求に基づいて物事を自由に決めて行動することをしない。日本人は、自分の考え方で状況を動かそうとするのはむしろ希で、「場」の全体状況を乱さないように期待される役割を果たしつつ、あわせて個人の目的を達成していく。また日本の組織の一つの特徴は、その「チームワーク」のあり方に認められる。すなわちチームのメンバーは、個人に明確に与えられた職務のみでなく、それぞれが全体状況を敏感に読み取り、そのなかでの自分の立場に対して、「状況が要求している」と自ら考える役割を自ら認識し、周囲の人々との調和を図りながら、人々との関わりのなかでその役割を果たすことのできる人間でなければならない。「指示待ち世代」という最近の若者たちに対する批判は、こうした行動がとれない若者たちに対する旧世代の不満の表れであろう。この言葉は、いわば日本文化の裏返しであると言ってよい。

日本の組織でこのようなチームワークが機能するのは、長期間一緒に働くなかで構成員たちが互いの立場や状況や気心を把握し、状況の求める必要を自ら察することができるからである。つまりいわゆる「以心伝心」「阿吽の呼吸」の仲間でない、こうしたチームワークは機能しない。「よろしくお願いします」という言葉は、こうした日本人の思考方法と行動様式をよく物語っている。要するに日本人は自分のなかに内在する自分の想いを中心に行動するのではなく、感じ取った全体状況のなかの自分の立場とそうした自分に期待される役割を鋭く認識し、なるべくそれに添うよう、しかし主体的に努力しようとしている。こうした日本人の判断と行動は、多くの

日本人に見られ、日本人の重要な行動原理となっている。この点は、大変に興味ぶかい論点なので、改めて詳しく検討することを予定している。

### 3 自己の想いに執着する中国人

これに対して、中国人の行動原理は日本人とも大きく異なっている。中国人は欧米人のように「法」というものを鋭く意識することなく、また、日本人のように、「場」における自己の位置を認識し、その位置に期待される「場」の公的ルールや期待を満たしつつ自己を主張するのではなく、中国人の場合、権力的規制によって押しつけられたもの以外、外部からの規制を強く意識することなく、自己の想いにしたがって自由に行動する傾向がみられる。そのため、中国人の行動のあり方は、多種多様で、相互に非常に異なっている。

ある日本の大学で担当の講師が、学生たちの名前をよく覚えるために、カードをたて折りにして名前を書き、机の上に置くように要請した。その時、10人いた日本人は指示されたようにカードをたて折りにして名札をつくった。これに対して、この時7人いた中国人の留学生のうち素直に縦折りにしたものはごく少数で、横折りにするもの、カードの裾をさらに織り込んで(つまり一種の4つおりにして)カードの安定性をさらに増すように工夫したものなど、多様な反応が現れた。

こうした思いがけない多様な反応が現れることが多いため、中国人同士でさえも、なかなか相手の気持ち・行動を読むのが難しい。このような事情のためか、中国人同士のコミュニケーションにあっては、自分の意思をはっきりとストレートに相手に伝えるよう求められる。

このため、子育てのなかでも、曖昧な表現や仕草や雰囲気での親の意図を子供に伝えるのではなく、子供に言葉ではっきりと指示を与えるのが普通である。一般的に言って、中国人は、明確な意思表示しか受け取らない。このため、日本の組織で長年働いた中国人の中には、自分が「空気」を読めないと感じている者も少なくない。

これに対して、日本人の場合は「今日は、お忙しそうですね。」くらいの挨拶で相手の自分に対する気遣いを十分に感じとることができるし、わずかのお菓子のやりとりでも、十分に相手の気持ちを感じ取ることができる。

中国人は、相手が親友であっても、熱烈に話し合う光景がよく見られる。親友であっても互いに考え方が異なって、よく話し合わないと相手が何を考えているのか分からない。相手と話し合うことは、相手の考え方・感情・好みなどについて知るうえで重要なのであって、普通中国人は、自己の想いに執着する相手との間で共通感覚をもつことまでは考えていない。日本人同士は話し合いの中で互いに相手と共通感情を求めようとする意識が強く、相手と歩み寄る傾向が強く見られる。千石保はこのような日本人の行動特性を「同化構造」と呼んでいる<sup>30)</sup>。

中国人の場合は、いくら話し合っても相手と共通感情を得られるとは思っていないので、これを求めることはない。よく話し合うのは、相手とのつながりを維持したり感情を深めたりする。

中国人は物事を判断する基準を自分で設定するので、同じ中国人でも一括りするのはいさばい困難である。また、一人の中国人でも、その者・ことに対するその時の個人の考え方や利益や感情は異なる。したがって、一人の中国人は時と場合によって大きく異なることになる。

ここで注意すべきことは、同様の現象は日本人の行動にもよく見られるが、そのことのもつ意味は、中国人のそれとは大きく異なっていることである。日本人の場合は「場」の全体状況の変化とそれによって起こる自分の立場の変化、それに伴う自分への周囲の期待の変化によってその行動が変わることになる。これに対して、中国人の場合には、同様の関係であっても、その人物のもつ相手に対する「情い」(想い)の如何によって、その付き合いは大きく異なる。「関係」は目的を達成するための「道」であって、その道を使えるかどうかを決めるうえで決定的に重要なのは「情」(想い)である。見知らぬ他人同士でも気が合えばすぐ親しくなり、「情」を通わ

せようとするし、逆にどこかで相手に傷つけられた、あるいは面子をつぶされたと感じる時、中国人の関係は、たちまち極端に悪くなることになる。

## VII 中国人の「自己の思いへの執着」:結び

これまで中国人自身も、中国研究者も中国人の行動様式を説明する最も重要な概念を「関係」に求めてきた。確かに「関係」の重要性は日々中国人によって強調されているし、これを否定することは論外といえる。しかし、中国人の行動様式の特徴を抽出すると、「関係」という枠組では説明しきれない部分が少なくない。「関係」は確認しやすい人間関係であり、かつ長期的に安定していると「想定」される人間関係であることから、安定した人間の関係様式を分析するうえでは有効な概念である。逆説的に響くかもしれないが、例えば、日本人の関係様式は、職場や近隣を媒介として比較的安定しており、〈関係〉の概念(それは中国的な「関係」では勿論ない)に基づいてこれを説明することが有効であるとさえいえるかも知れない。「特定の集団・組織の一員である」ことなどは、明確な〈関係〉として意識される。

しかし、多様性や変化の激しさなどが顕著に表れる中国人の行動を分析するうえでは、「関係」の概念では不十分であると筆者は考えている。

中国人が物ごとを判断する基本軸は、「自己の思いへの執着」であるといつてよい。すでにみたように、欧米人の場合は「神」との約束、「法」意識、「契約」また社会の一員としての責任などの規範が、行動を決定する基本軸だと考えられる。日本人の場合、「場」すなわち自分を取り巻く全体の状況のなかでの自分の位置(立場)とそうした自己のあるべき振る舞い方として良しと感じられる行動、およびその立場に対する周囲の期待を満たす行動がその基本軸だと考えられる。日本人は非常に共通感覚に到達しやすいし、個々人の行動はなるべく他人に違和感を与えないような、また周囲から納得を得られるようなものとなりがちである。このため互いに相手の行動を読み取りやすく、暗黙の了解のうちに落ち着いて各自の行動に取り組むことができる。反面、こうした共通感覚が成立しないと、日本人の関係は、気詰まりなものとなりがちである。しかし、すでに見たように、中国人は欧米人や日本人と大きく異なっている。

中国人はもの・ことに対する自分の考え方・感情・利害などから出発して、その時その場の行動を決めることを特徴としている。つまり、極端に言えば、中国人は何かの大きな枠や状況や周囲などよりも、自己の意思にしたがって一存で物事を決めることが多い。言い換えれば、中国人の場合、自分の行動を決めるに際して、より自由に自己制御できる状況に置かれているといつてよい。そして自己の相手に対する「情」(思い)の如何によって、中国人の行動は非常に異なってくる。「深い思いに基づく二者間の情」というキーワードをもって、中国人の行動様式のダイナミックな特徴、人間関係の構築の仕方、また関係の本質を理解することが有効であると筆者は考えている。このことは反面、中国社会が何らかの安定を得るためには、強力な権力的統合を必要とすることを意味する。

ここで危険を承知で、こうした関係を説明するのにわかりやすいと思われるアナロジーを用いると次のようになろうか。すなわち、「関係」(guanxi)は「水の流れる溝」のようなもので、「人の思いと情」こそがこの溝を流れる水のようなものである。たしかに「溝」の存在によって水はある方向に流れやすくなるが、水の流れ方によって新たな「溝」がたちまちつくられたり、存在した「溝」も、水(すなわち「思いと情」)が流れなくなったために、空の「溝」になってその機能を失ったり、土砂の崩落によって、「溝」の形さえも消滅する。「関係」(guanxi)を「水の流れる溝」(溝と水との一体化したもの)と考えたとしても、その本質は「水」すなわち「思いと情」でなければならない。

このように「自己の思いへの執着」が中国人の行動様式をより根源的に説明できる原理ではないかと筆者は考えている。

注

- 1) 筆者は、はじめ、拙稿『日・中社会の行動原理と行動様式:比較分析(1)―「場における自己の認知」 VS. 「二者間の情(qing)への執着」』(熊本大学社会文化研究 9)(熊本大学大学院社会文化科学研究科、2011)において、日本の社会における人々の行動原理を「場における自己の認知とこうした自己に期待される行動」に求め、中国社会における人々の行動原理を「二者間の情(qing)への執着」に求めたが、その後の考えの展開、より厳密な表現への模索によって、次のような修正を行っている。すなわち日本社会のそれを「場における自己の位置の認知、こうした位置に期待されると自ら感じる行動」とし、中国社会のそれを「自己の思いへの執着及びその帰結としての、二者間の関係」に求めることである。この修正の内容、両者の違いについては拙稿「経営組織比較分析の一視点―日中比較文化論の適用―」(『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』2015年3月)において表明しているが、より詳しく検討したものとして、岩田奇志「日・中社会の行動原理と行動様式:再考―場における自己規定 VS. 自己の思いへの執着―」を近く公表の予定である。
- 2) 孫文の「一盤散砂(中国人は砂のようにまとまりがない)」という発言に対しては、多く「関係」によるつながりの重要性を指摘する反論が提出されている。
- 3) 経済改革開放以前、資源が乏しい故に、逆に「関係」が重要な機能を果たし、(たとえば手に入りにくい寝台車の切符を手に入れるためには、「関係」は不可欠であった)、経済改革開放以後の市場経済化の動きによって、「関係」を経なくても市場で必要なものを手に入れることが可能となり、逆に「関係」に頼ることが少なくなった面もあり、この関係は単純ではない。
- 4) 園田茂人「中国社会の『関係主義』的構成」『現代中国』第68号、1995年7月、50-65頁。  
中国社会の分析において「関係」を重視する研究者としては、まず園田茂人を挙げておく必要がある。園田は、『『関係主義』社会としての中国』野村浩一・高橋満・辻康 吾編著『もっと知りたい中国 II―社会・文化篇』(弘文堂、1991)において「関係主義」についての大変興味深い展開を行っているが、『中国人の心理と行動』(日本放送出版協会 2001)が、園田茂人の「関係主義」に関する考察の総決算であると見られる。
- 5) 園田茂人、前掲書、2001年、190頁、214頁。
- 6) 園田茂人、前掲書、2001年、163頁。
- 7) 園田茂人、前掲、2001年、163頁。
- 8) 園田茂人、前掲書、2001年、171頁。
- 9) 園田茂人、前掲書、2001年、178-179頁。
- 10) 園田茂人、前掲書、2001年、163-180頁。
- 11) 楊清媚「費孝通眼中的“礼”与“文化”」費孝通『郷土中国 生育制度 郷土重建』商務印書館、2011年、256頁。
- 12) 費孝通『郷土中国 生育制度 郷土重建』商務印書館、2011年、25-39頁
- 13) 翟偉学『中国人的関係原理：時空秩序、生活欲念及其流変』、北京大学出版社、2011年、223頁、229頁。
- 14) 翟偉学『中国人的関係原理：時空秩序、生活欲念及其流変』、北京大学出版社、229-233頁、2011年。
- 15) 黄光国編、『人情与面子：中国人的権力遊戯』、黄光国編『人情与面子：中国人的権力遊戯』中国人民大学出版社、2011年、1-21頁。
- 16) 翟偉学『中国人的関係原理：時空秩序、生活欲念及其流変』、北京大学出版社、2011年、229頁。
- 17) 翟偉学『中国人的関係原理：時空秩序、生活欲念及其流変』、北京大学出版社、

- 2011年、153頁。
- 18) 翟偉学『中国人的關係原理：時空秩序、生活欲念及其流變』、北京大学出版社、2011年、148-151頁。
  - 19) 翟偉学『中国人的關係原理：時空秩序、生活欲念及其流變』140頁、北京大学出版社、2011年。
  - 20) 費孝通『郷土中国 生育制度 郷土重建』商務印書館、2011年、11頁。
  - 21) 馬英華『中国人弁護士・馬さんの交渉術』PHP 研究所、2009年、26-27頁。
  - 22) 馬英華、前掲書、28頁。
  - 23) 馬英華、前掲書、59頁。
  - 24) 吉村章『知っておくと必ずビジネスに役立つ：中国人の面子（メンツ）』総合法令出版株式会社、2011年、16-17頁。
  - 25) 園田茂夫、前掲書、2001年、76頁。
  - 26) 江河海『中国人の面子：一般庶民から政府高官まで、その行動原理の源はメンツである』はまの出版、2000年、9頁。
  - 27) 日本人のこうした傾向とその背景については、「経営組織比較分析の一視点—日中比較文化論の適用—」（『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』2015年3月）において、詳しく分析している。
  - 28) 馬英華、前掲書、28頁。
  - 29) 濱口恵俊、『「日本らしさ」の再発見』日本経済新聞社、1977年、77-78頁。
  - 30) 千石保『日本人の人間観—欧米人との違いを探る—』日本経済新聞社、1974年、120頁。